

〈研究ノート〉

## 中国西安の史蹟保護調査報告

### —古写真の活用

村松弘一

#### 要約

本稿では、足立喜六著『長安史蹟の研究』掲載の20世紀初の西安の古写真と最近十年間に筆者が撮影した写真とを比較し、中国・西安における史蹟保護状況の変化と現状について論じたい。主に秦代から唐代までの史蹟を対象とする。1「秦代の史蹟」では①咸陽宮②阿房宮③秦の始皇帝陵、2「漢代の史蹟」では①前漢長安城未央宮前殿遺跡②天祿閣遺跡③茂陵と霍去病墓④漢代陵墓と遺跡保護、3「唐代の史蹟」では①大明宮含元殿②太液池蓬萊亭③曲江池④宝慶寺、4「その他の史蹟」では①文廟と碑林②迎祥觀と景雲鐘③大清真寺④西安城壁⑤五丈原を分析する。世界遺産「シルクロード：長安—天山回廊の交易路網」の一部として登録された史蹟は遺跡公園として整備され、信仰の場として機能している史蹟は100年の時間を経ても変わらないものもある。その一方で郊外にある皇帝陵では遺跡破壊がおこなわれるなど、史蹟・遺跡による保護状況の「格差」が顕著になっている。

#### キーワード

西安 長安 史蹟保護 古写真 世界遺産

#### はじめに

急激な経済発展を遂げている中国では街の風景が毎年のように変化している。各地に高層ビル、高層マンションが建設され、都市間を結ぶ高速鉄道網も網の目のように各地につながっている。中国の西北部と北京や沿海部をつなぐ拠点となっている西安も例外ではない。1990年代初めにはその都市域は明代の城壁とその周辺に限られていたが、その後、城壁の南から秦嶺北麓の長安区までの間の開発が進み、現在では城壁の北、渭河の南岸まで高層ビルが林立している。2000年代初めには18時間かかった北京—西安間も、今では三分の一の6時間半で結ばれている。人口も2018年には1000万人をこえ、東京を上回る日も近い。この都市の拡大・整備が続くなか、古代中国の中心であった西安の遺跡・史蹟のありかたも変化しつつある。経済格差と同じように、遺跡保護のレベルも格差が広がっているように思う。経済活動や観光と連動する遺跡は手厚く保護され、そうではない遺跡の保護は先送りにされ、破壊されるままになっている。西安の遺跡保護を見る上で、注目されるのは、「一帯一路」の経済政策と連動す

むらまつ こういち：淑徳大学 人文学部 教授

る世界遺産「シルクロード：長安―天山回廊の交易路網」と関係するかどうかである。この世界遺産の項目は中国・カザフスタン・キルギスにまたがるシルクロード関連遺跡を含むもので、シルクロードの起点となる西安には「前漢長安城未央宮遺跡」「唐長安城大明宮」「大雁塔」「小雁塔」「興教寺塔」の各遺跡が遺産の構成資産として登録された。2008年3月に世界遺産暫定リストへ記載され、2014年に世界遺産リストに登録された。これより先、1987年には西安の東、臨潼区の「秦始皇帝陵及び兵馬俑坑」が世界遺産に登録されている。

本稿は約100年前に日本人によって撮影された西安の遺跡の写真と筆者が2007年から毎年調査、撮影している写真を比較しながら、この100年、さらにはこの20年でどのように史蹟保護の状況が変化したのかについて、整理したい。それは、古写真を史蹟保存、保護に活用する方法についても考えることとなるだろう。主に活用する古写真は足立喜六『長安史蹟の研究』（東洋文庫、1933年）である。足立喜六は1906年から1910年まで西安の陝西高等学堂に数学・物理を教える日本人教習として赴任していた教師である。彼が西安に滞在していた時には、考古学者の関野貞、東洋史学者の桑原隲蔵、中国哲学者の宇野哲人など出会い、西安の歴史にも関心を持つに至り、帰国して教師を定年となった後、『長安史蹟の研究』を上梓した<sup>1</sup>。以下、足立氏の100年前の写真と筆者が2002年以降撮影した西安史蹟の写真を比較しながら、遺跡保護の歴史について考察したい。

## 1、秦代の史蹟

### ① 咸陽宮

咸陽宮は戦国時代から始皇帝の時代までの秦の都である。前4世紀半ばの商鞅の第二变法で櫟陽から遷された。咸陽宮遺跡は西安市から西北約20km、渭水の北に位置する。漢が長安に都を定めて以降、咸陽は歴代王朝の都となることはなく、荒廃した。清末の状況は足立によれば「今日咸陽の故地を訪えば何らの遺跡もなく、実に索莫（さびしさ）を極めたものである」と記している。足立は写真も掲載していない。咸陽宮は1960年代から発掘がはじめられ、1号から3号までの宮殿遺跡が発見されている[写真1-①A]。遺跡の側には秦咸陽宮遺址博物館がある。博物館、遺跡ともに入場料は無料であるが、2019年に訪問した際には、ほかの観光客もおらず、かつては剪定をしていた遺跡周辺の草木も整備されていない状況で、古代統一帝国の都の遺跡とは思えないような保護状況である。咸陽宮遺跡に登り、北を見ると漢の高祖劉邦の陵墓である長陵とその皇后・呂後の墓がある。東側の高台は大きく凹んでおり、秦の時代には蘭池があったとされるが、今はなく、そこには火力発電所が建設されている。南を見ると渭河を望むことができ、その先には漢の長安遺跡があるはずだが、大気汚染によるものか、いつも、もやがかかっており、筆者の眼で見えたことがない。2018年には咸陽宮遺跡から渭河までの間には、秦代の建築を復元したような建築物が見えた。テーマパークのようにも見える。今後、訪れてみたい。

2

咸陽宮には城壁が見つかっていない。渭河によって浸食されたためと考えられるが、宮殿の西南の窯店では咸陽宮の手工業区が発掘され、井戸の遺構も発見されている。渭河北の咸陽附近には咸陽宮や漢代皇帝陵があるが、各遺跡をつなぐ交通アクセスも悪く、西安市内や兵馬俑に行った観光客を引きつけることができている。過剰な人数の観光客が来ることによる遺跡破壊も問題ではあるが、少ないことによる遺跡管理の放棄も問題となるだろう。

### ② 阿房宮前殿

前221年の始皇帝による天下統一後、秦の首都咸陽の人口が急増し、咸陽宮が手狭となった。その

ため、渭河以南に都市域を拡大した<sup>2</sup>。統一直後から興楽宮・章台宮・信宮を造り、始皇35年(前212年)には、阿房宮の建設を開始した。『史記』始皇本紀には、阿房宮の前殿に一万人以上が上ることができたという。ところが、阿房宮の完成前に始皇帝が崩御し、秦王朝を滅ぼした項羽によって阿房宮は焼かれてしまった。足立喜六は阿房宮について「三橋鎮の南の阿房村と称する寂寞な村落にある。村内には阿房宮と呼ぶ古墳形の丘陵がある。基底は不等辺三角形で……丘陵の形は円くして西南の中腹には三尺余りの平頭な花崗岩が三個同じ高さに並列している。当時建築に用いた柱礎の残片かと想われる。」と記している。足立が見た阿房宮は、[写真1-②A]のように、墳墓のような丘陵状の遺跡である。これは始皇帝が天を祭った施設と考えられている阿房宮上天台遺跡である。未央宮前殿遺跡から約5km西南の阿房宮村にある。近年、この遺跡は中央部に階段が造られるなど、大規模な整備がおこなわれている。しかし、前殿遺跡について足立は全く言及しておらず、写真も掲載していない。おそらく足立は前殿を見ていなかったのではないか。前殿遺跡は、上天台遺跡の西側、現在の大古城村・小古城村から趙家堡村までの東西約1.5kmの巨大な遺構である。筆者が2011年8月に訪れた時には、二つの村にまたがる遺構の上に多くの人々が居住していた。すでに生活の場となっていた前殿を清末の人々は遺跡として意識していなかったのではないだろうか。ところが、2019年8月に訪問した際には、前殿上の大古城村・小古城村の人々はすべて移動し、家屋は取り壊され、その跡には植樹がなされていた。このように前殿を保存することで、東西に広がる巨大な前殿の存在がようやく理解できる [写真1-②B]。なお、前殿の西端には黄土を層状に積み上げた版築構造の遺構を確認できる [写真1-②C]。現地の人に聞いたところ、旧住民は附近の高層マンションを分配され移り住んだそうである。なお、前殿遺跡と道



写真1-①A咸陽宮1号宮殿遺跡  
(2011年9月筆者撮影)



[写真1-②A] 阿房宮遺跡  
(1908年11月足立喜六撮影)



[写真1-②B] 阿房宮前殿遺跡①  
(2019年8月筆者撮影)



[写真1-②C] 阿房宮前殿遺跡②  
(2019年8月筆者撮影)



路を挟んだ反対側に阿房宮を復元したテーマパーク「阿房宮楽園」があり、2002年には筆者も見学した。しかし、2019年現在、営業を停止し、取り壊され、その跡地には阿房宮に関する展示施設が建設される予定とのことである。

### ③ 秦の始皇帝陵

秦の始皇帝の陵墓は西安市の北東約30km、驪山の北麓に位置する。足立喜六は「その形は裾野の弧形をなして、恰も火山質の山岳に似ている。臨潼県から馬を駆れば、一時間足らずで陵下に達することができる。陵の傾斜は甚だゆるやかで、騎馬のまま頂上に登られる。陵上には一面に茅萱が生じているが、樹木は一本もない。……中央にやや平坦な段丘があって頂上は広くして平滑である」と記している。陵には「樹木は一本もない」とあるが、『史記』始皇本紀には「草木を樹えて以て山を象(かたど)る」とあり、建設当初は、背後の驪山と同じように見せるために草木を植えた。現在は陵の全体がザクザクの林に覆われている。足立が撮影した[写真1-③A]を見ると、墳丘の稜線が途中で屈折し、二段階になっていることがよくわかる。木々が鬱蒼としている現在の[写真1-③B]でも屈折していることがわかる。なお、背後の驪山の稜線を合わせるように撮影した[写真1-③C]が足立と同じアングルの写真ということになるが、現在、その撮影場所はゴミ捨て場となっていた。

2009年2月に秦始皇帝陵博物院が成立し、2010年10月1日に始皇帝陵の陵園と兵馬俑坑を合わせた秦始皇帝陵遺址公園が成立した。それ以前、始皇帝陵周辺の陪葬坑は陝西省考古研究院が発掘していたが、2009年以降は始皇帝陵園内の発掘と管理は秦始皇帝陵博物院が担当し、始皇帝陵北側の建築遺



[写真1-③A] 臨潼県東秦始皇帝陵  
(1908年12月25日足立喜六撮影)



[写真1-③B] 始皇帝陵と驪山①  
(2018年8月筆者撮影)



[写真1-③C] 始皇帝陵と驪山②  
(2007年3月筆者撮影)



跡や北司馬道遺跡の発掘などをおこなった(発掘を担当者は博物院の張衛星氏)。この時期、始皇帝陵の周辺は大きく変わった。筆者が訪れた2009年10月までは始皇帝陵の墳丘の北側に階段があり、観光客は自由にその階段で陵の頂上まで登ることができた。1990年代はその階段の両側に兵馬俑のミニチュアのお土産物売りの現地の人がいた。2010年7月には始皇帝陵前の道路も通行止めとなり、階段も同じ頃に撤去され、現在は登ることはできない。

1974年に始皇帝陵から東1.5kmの地点で兵馬俑坑が発見され、始皇帝陵と兵馬俑坑は、1987年に世界遺産へ登録された。兵馬俑博物館を訪れる観光客は多いが、そこから始皇帝陵へ移動する人は少ない。始皇帝陵は頂上に登ることができなくなったことで、陵の東南の石鎧坑・百戲俑坑(2019年8月には閉鎖中)、西の御者俑坑を電気自動車で回り、陵の北から写真を撮影するというコースしかなくなったことが少ない原因かもしれない。

## 2、漢代の史蹟

### ① 前漢長安城未央宮前殿遺跡

前漢時代の首都・長安は、現在の西安市の西北約9kmに位置する。長安城東南の濠は団結水庫として今も水をたたえ、それは衛星写真でも確認できる。未央宮は漢の長安城の西南角に位置する。漢の高祖7年(前200年)に蕭何が修造し、前漢王朝の歴代皇帝はここに常居して生活した。宮殿区には前殿を中心に宣室殿・温室殿・清涼殿などがあり、北には武庫・太倉・石渠閣・天祿閣、南には滄池が分布する。未央宮は周囲よりやや高い龍首山の上に造営された。龍首山は龍首原とも呼ばれる高台で、東西に広がるこの高台の東には唐代の大明宮、西には漢の未央宮が建てられた。足立は「(清末の)西安城の西門よりこれを望見することができる」と言うが、現在、城壁の西門に登っても、多くの高層ビルにはばまれて、漢長安城の方向を見ても未央宮も何も見えない。

足立は前殿の南に広がるスロープを南中北の三段にわけられるとし、前殿にあたる北の高台の周辺一帯には漢瓦の破片が特に多く堆積しており、当時の壮観さがわかると記している[写真2-①A]。2009年に筆者が訪問した時には、前殿の南側は木の板が一面に並べられ、その上を見学者が歩けるように整備されていた[写真2-①B]。ところが、2019年に訪れた際には、その木板は完全に撤去され、中央の階段もなくなっていた[写真2-①C]。さらに、周囲の住居や農地は遺跡公園として整備され、人は誰も住んでいない。まだ、建設途中のようで、入場料を支払うことなく中に入ることはできるが、長安城の南城壁の近くでバスを下り、30分程度歩かないと前殿までたどり着くことはできない。公園完成後には始皇帝陵の周囲のように電気自動車が走るようである。

### ② 天祿閣遺跡

未央宮北に位置する天祿閣は、『三輔黄図』巻六に「天祿閣、藏典籍之所」とあるように、漢王朝の国家図書館である。司馬遷はこの典籍を活用して『史記』を著したと考えられ、また、前漢末の劉向・劉歆らは蔵書をもとに図書目録と言うべき『七略』を作った。天祿閣遺跡は未央宮前殿遺跡から約800m真北に位置し、7mの高さがあり、その上には劉向祠がある[写真2-②A]。筆者が訪れた2009年2月には天祿閣小学校のなかに位置していた。天祿閣小学は1935年春に開学した。この学校は1932年、南京国民政府の下で発足した西京籌備委員会によって開設された。同時期に委員会によって設置されたのは、天祿閣小学と茂陵小学、昭陵小学の三校である。茂陵小学は霍去病墓の近くに創建された。茂陵・天祿閣は漢の武帝とかかわりがあり、昭陵は太宗とかかわる。対匈奴戦で勝利した漢の武

帝と霍去病、突厥を一時的に滅ぼした太宗李世民は、異民族に勝利した名君であり、それを「中華民国」の「愛国」教育に活用した。近代において、文物や歴史事象は「郷土」意識、「愛国」意識の形成に大きく寄与したのである<sup>3</sup>。現在の中国でも多くの史蹟や発掘現場に愛国主義教育の拠点の看板が掲げられていることは興味深い。このような歴史を持つ天祿閣小学であったが、漢長安城内の整備によって、周辺の住民とともに移転し、天祿閣遺跡のみが遺跡公園のなかに残された。未央宮前殿から北を見ると、天祿閣遺跡の高台のみが見える。



〔写真2-①A〕漢未央宮址  
(1908年4月11日足立喜六撮影)



〔写真2-①B〕未央宮前殿遺跡①  
(2009年2月筆者撮影)



〔写真2-①C〕未央宮前殿遺跡②  
(2019年8月筆者撮影)



〔写真2-②A〕天祿閣  
(2009年2月筆者撮影)

### ③ 茂陵と霍去病墓

6

茂陵は漢の武帝の陵墓である。前漢代の11の陵墓のうち9つは渭河の北の咸陽原の上に位置している。9つのうち、最も東側にあるものが景帝の陽陵、最も西にあり、規模も最大のものが茂陵である。かつては墳丘の頂上に登ることができたが、2010年に筆者が訪問した時には墳丘の周囲に鉄線がめぐらされ、墳丘の上に入ることはできなくなっていた。現在の茂陵の上には植樹がなされている。足立の撮影した写真には墳丘の上に樹木はない〔写真2-③A〕。茂陵への植樹は、1930年代、西京籌備委員会によってはじめられた<sup>4</sup>。筆者が2002年・2018年に撮影した茂陵の写真を見ると、樹木の大きさはやや大きくなっていることがわかる。〔写真2-③B・C〕

霍去病墓は茂陵の東1 kmにある。墳丘の形状は祁連山をかたどったと言う。墓の南には茂陵博物館がある。霍去病は北方の遊牧民の匈奴との戦いで多くの勝利を得て、河西回廊を切り開いた人物である。



霍去病墓は1930年代の西京籌備委員会によって重視され、道路や小学校の建設などの整備がおこなわれた。当時は墓の周囲に動物や人物を彫った多くの巨石がころがっており、1940年代に西北文物芸術考察団の王子雲らがそれらを調査し、野外展示施設を建設した<sup>5</sup>。いくつかに分かれた展示施設は石製の廊下で結ばれていた〔写真2-③D〕。現在、墓により近い場所に新たな展示施設が開設されたが、そのまわりにはいまでも石製の廊下と柱は残されている〔写真2-③E〕。



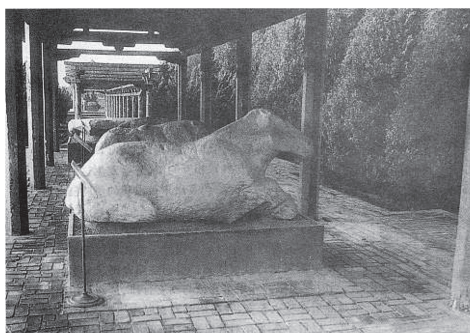
〔写真2-③A〕 漢武帝茂陵①  
(1909年8月15日足立喜六撮影)



〔写真2-③B〕 漢武帝茂陵②  
(2002年8月筆者撮影)



〔写真2-③C〕 漢武帝茂陵③  
(2018年8月筆者撮影)



〔写真2-③D〕 霍去病墓石刻①  
(1940年代撮影か)



〔写真2-③E〕 霍去病墓石刻①  
(2010年8月筆者撮影)



④ 漢代陵墓と遺跡保護

宣帝の杜陵は現在の西安市の東南に位置する。墳丘をもつ漢代皇帝陵で渭河の南に位置する唯一の墓である。現在は整備が進み、陵の側には漢代瓦当博物館がある。杜陵の上から東南方向を見ると皇后陵と多くの陪葬墓が見える。最も大きい陪葬墓である皇后陵の2009年の写真では、墳丘が段々畑状になっており、遺跡の破壊が顕著である [写真2-④A・B]。2019年8月に撮影したのも同様に段々畑状になったままであった。

元帝の渭陵は渭河の北、茂陵の東に位置する。四角錐で頂部近くにテラスのある段がある。この二段階目の南側は中央に向かって陥没している [写真2-④C]。2014年、現場を訪れた際、その右側に巨大なハート型に墳丘がえぐられている場所を発見した。誰がおこなったのかは不明であるが、遺跡破壊であることは明らかであった [写真2-④D]。

厳重な保護がなされている茂陵や景帝の陽陵とは異なり、多くの皇帝陵や陪葬墓は管理がなされておらず、現在でも破壊がおこなわれている。西安のように無数に遺跡がある都市では、管理が行き届かない遺跡も多く、遺跡保護は今後も重要な課題となるだろう。



[写真2-④A] 漢宣帝杜陵陪冢  
(1908年5月16日足立喜六撮影)



[写真2-④B] 杜陵陪葬墓(皇后陵)  
(2009年3月筆者撮影)



[写真2-④C] 漢元帝渭陵  
(1908年12月23日足立喜六撮影)



[写真2-④D] 元帝渭陵の遺跡破壊  
(2014年1月筆者撮影)

### 3、唐代の遺跡

#### ① 大明宮含元殿

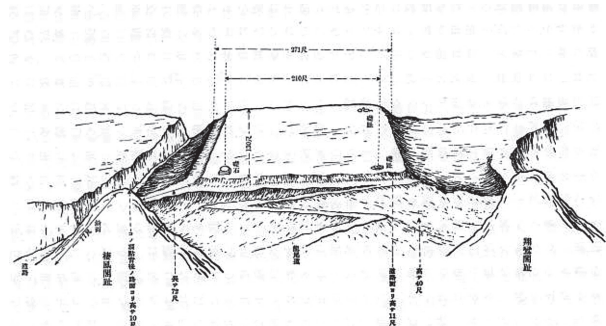
唐の大明宮は現在の西安の城壁の東北に位置する。南北2,256m、東西1,674mの巨大な宮殿区である。唐の長安の初期の宮城であった太極殿は城壁の北端中央に位置していた。二代皇帝の太宗李世民の時代、父の高祖李淵のために長安城の城壁外の東北に新たな宮殿区の建設をはじめた。これが大明宮である。大明宮は長安城の北に東西に広がる龍首原という高台の上に位置する。高宗は太極殿が低く湿った土地にあるため、平時の政治の場を高台の大明宮に移転させた。大明宮には含元殿・宣政殿・紫宸殿・麟徳殿・三清殿・清思殿などの宮殿や太液池などが建設された。南の丹鳳門から入って最初の巨大な宮殿が含元殿で、改元や即位の儀式、外国使節との謁見などがおこなわれた。

足立喜六は1907年9月3日に含元殿を訪れている。足立は当時の含元殿の状況について「(含元殿の遺跡の) 東南隅と東北隅にはやや凸起した瓦石の堆積があるのみだが、西南隅には更に黒大理石の丸柱の礎石が存在している。……この辺には瓦石や花磚の破片が夥しく堆積して、その東南の断崖のごときはこれが累々として数尺の高さをなしている」とある〔写真3-①A・B〕。

その後、1930年代になると黄河下流域の河南省で発生した黄河の洪水を逃れて多くの河南人が西安に避難し、西安駅の北に位置する大明宮遺跡付近に居住した。大明宮周辺は西安方言とは異なる河南方言を話す貧しい人々が住む地区と言われ、それは2000年代まで続いた。2007年に筆者が訪れた時には、相変わらず大明宮のまわりは貧しい人々が居住していたが、含元殿はユネスコの支援を受け、基壇がレンガで覆われ、その上には唐代の宮殿が復元された。しかし、完成セレモニーの直後に大風の被害を受け、張りぼての屋根は吹き飛ばされてしまった。筆者が行った時は、宮殿が破壊された後で、入場できなかったが、何とか交渉して中に入れてもらうことができた〔写真3-①C〕。その後、世界遺産の登録を受け、加速度的に大明宮の周辺の遺跡公園建設が進められた。周囲にあった貧しい人々の住む街はすべて取り壊され、遺跡公園として再開発がおこなわれている。現地で聞いた話によれば、周囲の街に居住していた人々には、立ち退きと引き換えに大明宮遺跡公園の周囲に建設された高層マンションが分配されたという。なかには、マンションを売却するなどして、巨額の金銭を得た、富裕層も生まれているという。2019年に訪問した際には、上部の宮殿建築は取り壊され、レンガの基壇が残っている〔写真3-①D〕。



〔写真3-①A〕 大明宮含元殿  
(1907年9月3日足立喜六撮影)



(む壁を方北より方南) 圆形地の趾殿元含 圖一第

〔写真3-①B〕 含元殿の地形図  
(足立喜六作成)





【写真3-①C】大明宮含元殿①  
(2007年3月筆者撮影)

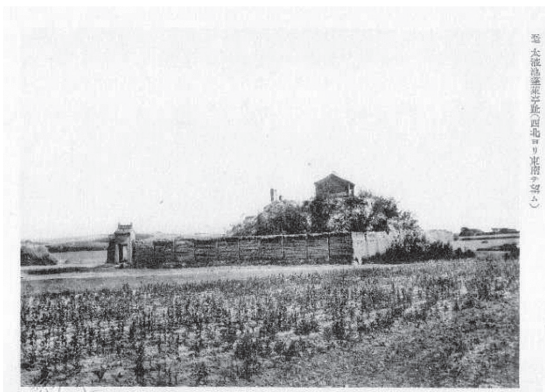


【写真3-①D】大明宮含元殿②  
(2019年8月筆者撮影)

## ② 太液池蓬莱亭

太液池は大明宮の中央部に位置する苑池である。足立喜六の記述によれば、含元殿の西北の孫家凹という村の南に円形の低地があり、それが太液池または蓬莱池と呼ばれた池の遺跡であるという。その低地の南岸の高台には唐朝の瓦磚が夥しく散布していた。中央には高台があり、台の上には小さい廟があり、その東には薬王洞があった。この高台は唐の太液池のなかの蓬莱山であったかもしれない、とある。続けて、足立は「この辺は大明宮の園池で、禁苑中の西内苑・九仙門及び右銀台門のあったところであるが、探求すべきそれ等の遺跡はない」と記している。当時の凹地には水はなく、遺跡の保護もされていなかったことがうかがえる [写真3-②A]。

筆者は2007年に大明宮を訪れ、足立の写真をもとに「太液池」を探した。当時、含元殿の北のエリアには貧しい人々の居住地が残っており、その集落の中へと入り、池を発見した。足立の時代には水は無かったが、2007年には池が存在していた。池は周囲のトイレとつながっていて、そこからの糞尿が池に垂れ流されている状況であった。写真からは伝わらないが、池の臭いは強烈であった。池の側の高台の上には2004年に建設された太液亭があり（「重建太液亭碑」による）、また、近くには関帝洞があった [写真3-②B]。2019年、再び同地を訪れた。含元殿とともに大明宮遺跡公園の一部として整備され、美しい池となっていた [写真3-②C]。かつて池の周囲に住んでいた人々も立ち退き、遺跡公園の周辺の高層マンションを分配されたという。



【写真3-②A】太液池蓬莱亭址  
(1908年7月11日足立喜六撮影)



【写真3-②B】太液池①  
(2007年3月筆者撮影)





[写真3-②C] 太液池②  
(2019年8月筆者撮影)

### ③ 曲江池

曲江池は唐の長安城の城壁の東南部に所在した池である。水と緑の豊かな場所で、秦代には宜春苑と呼ばれ、漢代にも苑池として利用された。池の西側の漢武泉を水源とし、唐代には黄渠を築いて南山から水を引いた、唐代には国都・長安の水源として、また、宴を楽しむ苑池として機能した。ところが、宋代以降、政治の中心が長安から離れたことで、黄渠の整備がなされず、水が流入しなくなり、池の水は枯涸した。足立は「今日、その遺址に至りて昔時豪遊の跡を尋ねると、池底は直径一支那里余りの円形の凹地となり、黄渠は曲池の東北端より東南に向かって広さ五・六間、長さ数里の渠跡となって連続して存している。また、江頭西北の岸上には古冢・台地が無数に隆起して、古瓦花磚の散布するものが甚だ多い」と記している。足立の写真やスケッチにも池の風景は見られない [写真3-③A・B]。

筆者が初めて曲江村を訪問した1993年にも池はなく農村風景が広がっていたことを記憶している。ところが、2000年代に入ると曲江池を復元するプロジェクトが進められた。唐代の曲江池は長安城東南の城壁の北と南に建設されていた。まず、2005年には曲江池の北側（城壁内）が「大唐芙蓉園」と称されるテーマパークとして開園した。南側は入場無料の曲江池遺跡公園として整備され、2007年8月に筆者も訪問した [写真3-③C]。その後、2019年8月にも訪れたが、その際、特に以前との違いを感じたのは曲江池周辺に高層ビル・高層マンションが立ち並んでいたことである [写真3-③D]。かつては市の中心部（現在の西安の城壁）から離れ、農村風景が広がっていた大雁塔や曲江池周辺も加速度的に都市開発がすすんでいることがよくわかる。



[写真3-③A] 曲江風景  
(1908年8月16日足立喜六撮影)



[写真3-③B] 曲江地形図  
(足立喜六作成)



〔写真3-③C〕曲江池遺跡公園①  
(2009年2月筆者撮影)



〔写真3-③D〕曲江池遺跡公園②  
(2019年8月筆者撮影)

#### ④ 宝慶寺

現在の西安の城壁の南門を入ってすぐ、書院門の前に宝慶寺塔がある。宝慶寺は隋大興城安仁房に創建され、唐の文宗の時代に宝慶華塔が建てられ、五代の初年に現在の場所に移築された。現在は清朝初期に重修されたこの華塔だけが残っている。この塔の内外には、唐の長安の光宅坊光宅寺の七宝台の内壁を飾っていた浮き彫りの石仏がはめ込まれている〔写真3-④A・B〕。石仏の多くは則天武後の長安年間に刻されたものである。足立喜六は「この花塔の周壁には十数個の精麗な半肉刻の石仏がある。本殿の内壁にも十二個の仏像が嵌入してある。いずれもみな精巧な盛唐の名作で、なかには開元・長安の年号を存するものもある。」と書き残している。1906年(明治39年)9月15日に撮影した石仏の写真があるので、その時の様子を記したのであろう。これらの石仏の多くは清末に国外へと流出する。宝慶寺旧蔵石仏は中国に7点、米国に4点、日本に21点の合計32点が現存している。中国所在のものは宝慶寺塔に残る6点を含む。米国はボストン美術館とワシントン・フリーアール・ギャラリーにそれぞれ1体ずつ十一面観音立像が収蔵されている。日本は東京国立博物館19点、奈良国立博物館2点(如来三尊像1点、十一面観音立像1点)である。東京国立博物館所蔵の石仏はもと細川家の所蔵であった。

足立が宝慶寺を訪問したのとほぼ同じ頃、この石仏に注目していた二人の日本人がいた。一人は岡倉天心であり、もうひとりはその弟子の早崎稷吉であった。彼らの活動によって、石仏は海外へともたらされた。2018年に永青文庫で発見された早崎稷吉の自筆メモ『造像所獲記』によれば、「明治26年(1893年)秋、岡倉先生に陪して支那に遊び、西安に至る。宝慶寺を訪うと偶然華塔の諸像を拝す。爾来十有余年、ひそかにこれを慕いて、夢寐にも忘れず。たまたま、明治36年(1903年)春陝西三原高等学堂の招聘に応じて再び西秦に客たり。越えて翌年初め、十一面観音像並楊花台造像を得たり。」とある<sup>6</sup>。明治37年(1904年)に十一面観音像を手に入れたことになる。手に入れた方法は、早崎が宝慶寺の建物の修復費として白銀500両を布施し、その代わりに石像15件を譲り受けたという。早崎と華塔寺(宝慶寺)の間で契約書も交わされており、石仏を「購入」したことがわかる。なお、早崎は明治37年(1904年)5月10日に宝慶寺を訪問していることが「早崎稷吉日記」によってわかるが<sup>7</sup>、その日に購入したのかはわからない。その後、早崎から細川護立が昭和3年に18件、昭和6年に1件(十一面観音立像)の合計19件を購入した<sup>8</sup>。米国のボストン美術館所蔵の宝慶寺伝来十一面観音立像は1906年に日本で岡倉天心が購入したという。おそらくは岡倉が早崎から購入したと思われる<sup>9</sup>。また、ワシントン・フリーアール・ギャラリー所蔵の宝慶寺伝来十一面観音立像は明治42年(1909年)にフリーアールと親しかった古美術商の松木文恭が購入を進めたリストにあるという<sup>10</sup>。





[写真3-④A] 宝慶寺華塔①  
(撮影年不明足立喜六撮影)



[写真3-④B] 宝慶寺華塔②  
(2007年3月筆者撮影)

#### 4、その他の史蹟

##### ① 文廟と碑林

清末の西安の文廟（孔子廟）内にある西安碑林は、辛亥革命以降、1912年に陝西図書館の管理下に入り、1938年には陝西省西安碑林管理委員会が管理した。1944年には碑林を基礎とした陝西省歴史博物館が開設され、1950年に西北歴史陳列館、1952年に西北歴史博物館と名称を変え、1955年には陝西省博物館となった。1990年代の陝西歴史博物館の開館により、現在の西安碑林博物館となった<sup>11</sup>。

1906年の関野貞の平面図では、文廟の門を入り、泮池を経て、北へ向かうと大成殿あり、その奥に碑林がある。足立が撮影したもののなかには文廟の写真がある [写真4-①A]。ところが、現在、碑林を訪れても、この文廟の写真のような大成殿は見られない [写真4-①B]。泮池から北へ向かうとそのまま碑林へと入ることができる。この文廟の中心たる大成殿は1960年代に焼失してしまい、その後、復元されることなく、現在に至っている。



[写真4-①A] 西安城内文廟  
(撮影年不明足立喜六撮影)



[写真4-①B] 碑林  
(2007年3月筆者撮影)

##### ② 迎祥観と景雲鐘

唐の中宗の景龍年間に創建した道教の道観である。睿宗の景雲2年(711年)には景龍観鐘が作られ、玄宗の時、迎祥観と称されるようになった。清末にも迎祥観は存在し、足立も訪れ「余程頽廢しているが、楼上には、なお景龍観鐘を縋してある。門は厳しく封緘してあって、按察使の特許がなければ開くことができぬ。……試みに手で軽く敲けば奥ゆかしい千年前の音が微かに聞こえる」と記している。足



立の写真ではわからないが、迎祥観そのものは100年前から信仰の対象にはなっていなかったようである[写真4-②A]。この景龍鐘はその鑄造された年から、現在は景雲鐘と呼ばれるのが一般的である。景雲鐘は1910年代には陝西図書館に移設され、そのころに迎祥観も取り壊されたのであろう。現在、迎祥観の跡地は学校が建てられたそうであるが、1960年代に焼失し、現在は駐車場となっている[写真4-②B]。景雲鐘は1950年代に碑林へと移設され、現在も展示されている。



[写真4-②A] 迎祥観  
(1907年7月3日足立喜六撮影)



[写真4-②B] 迎祥観跡地  
(2007年3月筆者撮影)

### ③ 大清真寺

西安城内にはイスラム教徒の寺院、すなわち清真寺が非常に多い。足立は「西安城内西大街の北、北門大街の西にある一画は、ほとんど回教徒の居住地で、その廓内には小皮院巷・大皮院巷・花角巷に各一所の大清真寺がある。……これらの清真寺の構造はいずれも同様に木造碧瓦の建築で、床を高く張って、清潔に洒掃した大広間の正面には祭壇を設けて、回教の經典の可蘭(コーラン)を置いてある。仏寺のような偶像や装飾は一もなく、ただ天を祀るのみである。毎週の金曜日の礼拝日には全部の教徒がこの大広間に集まって、コーランを誦して跪坐叩頭しつつ祈祷を捧げる光景は実に熱烈である。寺内の学校で子弟を教育して亜刺比亜(アラビア)語を教えている。」と記している。この「花角巷」はおそらく「化覺巷」のことかと思われる。現在の鼓楼から化覺巷の大清真寺までの間には多くの土産物商店が並んでいる。足立は大清真寺の様子を多くの写真に残している[写真4-③A]。その建築物は100年の時間を経た現在でもほとんど変わっていない[写真4-③B]。清末から現在まで信仰の場となっていることが、かわらぬ風景を生み出すのかも知れない。また、清真寺の写真には多くの子ども達が写っているものがある[写真4-③C]。寺内の学校でアラビア語を学んでいた子ども達なのであろうか。子ども達の背後の右側に「創建清真寺碑」がある。現在、その石碑は足立の撮影した写真の場所にはなく、寺に入ってすぐの建物に収蔵されている[写真4-③D]。



[写真4-③A] 西安城内清真寺  
(1910年7月13日足立喜六撮影)



[写真4-③B] 大清真寺①  
(2007年3月筆者撮影)



[写真4-③C] 西安城内清真寺境内二碑と回教徒児童  
(1910年7月13日足立喜六撮影)



[写真4-③D] 大清真寺② (Cと同位置)  
(2019年8月筆者撮影)

#### ④ 西安城壁

現在、西安の中心部に残っている城壁は明代に造られたものである。いくつかの城門から上に登ることができ、城壁の上を歩いて、または自転車を借りて一周することもできる。足立が撮影した西安の城壁の写真には北門2枚、南門3枚の合計5枚ある。このうち [写真4-④A・B] は、現在の西安城の南門(永寧門)を城壁の西南側から撮影したものである。A・B二枚の写真よく見ると、Aでは城壁に三つの楼閣があるが、Bでは中央の最も大きい楼閣が見られない。日中戦争時に日本軍は西安まで侵攻していないので、国共内戦の際に破壊されたと言われている。ところが、Bから約10年後の [写真4-④C] では、中央の楼閣が復活している。新たに再現されたのである。2019年に再現された楼閣を訪れたが、近年復元されたとは思えないほど年季の入ったように見える建物であった。古いものか、新しいものか、説明が欲しいところだが、特に観光客は気にしていないようにも思えた。



[写真4-④A] 西安城南門  
(撮影年不明足立喜六撮影)



[写真4-④B] 西安南門①  
(2007年3月筆者撮影)



[写真4-④C] 西安南門②  
(2018年8月筆者撮影)



⑤ 五丈原

五丈原は三国時代の蜀の諸葛亮が北の魏を攻撃する北伐をおこない、その際、拠点にした渭河の南の高台である。魏の司馬懿は渭河の北の郿県に拠点を構え、両陣営が対峙したが、諸葛亮が病死し、両郡が退却して戦いを終えた。諸葛亮最期の地である五丈原には「武侯祠」がある。現在の武侯祠(孔明廟)の入り口の門は、100年前とほぼ同じようである[写真4-⑤A・B]。ここも100年にわたって信仰の場として存在していたため、取り壊されないでいるのだろう。なお、2018年に訪れた時には、五丈原全体で大規模な観光開発が進展し、敷地内にお土産物の屋台や食堂ができていた。



[写真4-⑤A] 五丈原上孔明廟  
(1909年11月足立喜六撮影)



[写真4-⑤B] 五丈原武侯祠  
(2016年8月筆者撮影)

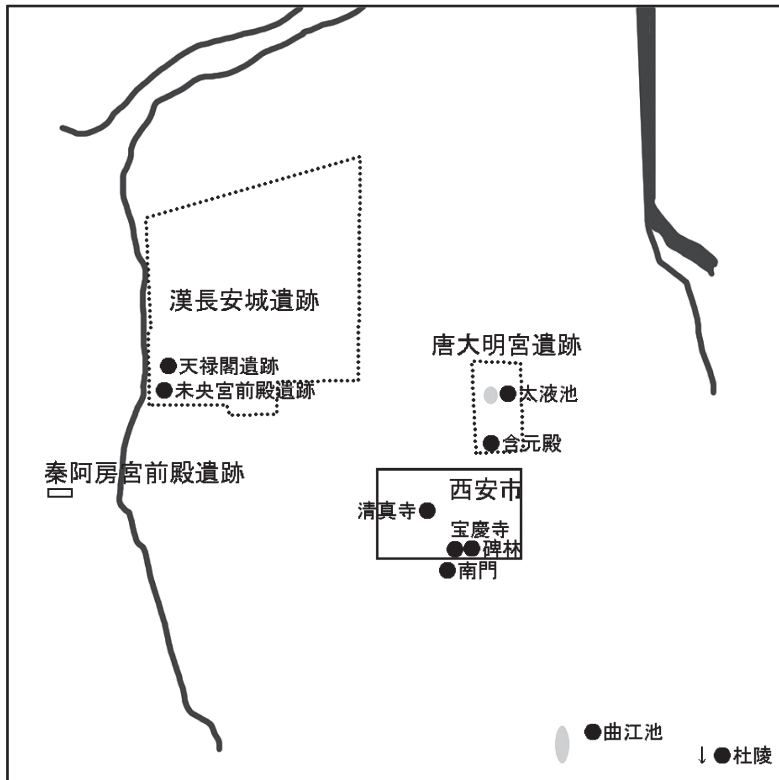
おわりに

以上、古都・西安の遺跡の100年前と現在の保存・保護状況について見てきた。足立喜六の見た西安と今の変化も大きいが、この10年の筆者が見た西安の激しい変貌ぶりも写真を比較することで理解することができた。毎年のように西安の遺跡を訪れ、調査することの意味はあるように思う。古代の遺跡は今でも変化し、生き続けているのである。

注

- 1 足立喜六については村松弘一「清末西安の教育と日本人教習—足立喜六を事例に」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』2号、2016年参照。
- 2 咸陽の渭河の南への拡大については、村松弘一「中国古代関中平原の都市と環境—咸陽から長安へ—」『史潮』新46号、1999年(のち、『中国古代環境史の研究』汲古書院、2016年所収)参照
- 3 村松弘一「西安の近代と文物事業—西京籌備委員会を中心に—」『近代中国の地域像』山川出版、2011年。
- 4 村松弘一「近代陝西省の開発と森林資源」『中国の環境法政策とガバナンス』晃洋書房、2011年参照。
- 5 西北芸術文化考察団については、前掲注(3)論文を参照。
- 16 6 石松日奈子「新発見! 早崎稗吉の自筆メモ『造像所獲記』」『季刊 永青文庫』105号、2019年
- 7 関紀子「東京国立博物館が所蔵する早崎稗吉の写真資料について—茨城県天心記念五浦美術館が所蔵する早崎稗吉日記との照合から—」『アート・ドキュメンテーション研究』20号、2013年
- 8 石松日奈子「永青文庫の中国石仏 早崎稗吉と細川護立」『季刊 永青文庫』105号、2019年
- 9 大西純子「早崎稗吉の活動について—ボストン美術館蔵岡倉覚三蒐集中国彫刻コレクションを中心として」『Museum』656号、2015年
- 10 前掲注(9)論文
- 11 碑林の歴史的経緯や展示空間の変遷については、村松弘一「近代西安碑林における展示空間の変遷—文物保護と博物館化」『淑徳大学人文学部研究論集』4号、2019年参照。





遺跡関連図1 (西安市内)



遺跡関連図2 (広域)

附記 ①：本稿の2018年・2019年の写真は、筆者が企画・実施した淑徳大学海外歴史研修（中国）の引率の際に撮影したものである。2回とも村松の担当するゼミ生が参加する方式で、海外ゼミ合宿としておこなった。参加者には他大学の中国史を研究する大学院生・学部生および研究者も参加した。本学の学生達にも、単なる海外体験以上の効果をもたらすことができたと確信している。今後はゼミ生のみならず、学部・学科を越えた海外フィールドワークのプログラムとして位置づけられるような展開をしてゆきたいと考えている。



2018年度 海外歴史研修 [三門峽・西安]  
秦の始皇帝陵にて



2019年度 海外歴史研修 [洛陽・西安]  
秦阿房宮前殿遺跡にて

附記 ②：本稿では2007年以來ほぼ毎年西安で調査した際の写真を利用した。各年の調査がどのような目的でおこなわれたものか、どこに調査に行ったのかを備忘録として付しておきたい。同じ史蹟を何回も訪問しているように思うが、結果として、本稿のような定点調査の資料として活用できた。

2007年3月	足立喜六古写真調査(秦始皇帝陵・宝慶寺・西安碑林博物館・華清池・唐長安大明宮・大雁塔・小雁塔・興慶宮・関八仙庵・迎祥觀跡・大清真寺・城隍廟・貢院跡・崇聖寺跡・大興善寺・青龍寺・西安城壁)
2007年5月	天水調査(五丈原・漢景帝陽陵)
2007年12月	陝北調査(陝西師範大学博物館・西安碑林博物館)
2009年2月	足立喜六古写真調査(漢長安未央宮・天祿閣・曲江池遺跡・西安碑林博物館・小雁塔)
2009年10月	秦始皇帝陵調査
2010年3月	足立喜六古写真調査(漢宣帝杜陵・董仲舒墓・城南清真寺・臥龍寺・西安碑林博物館・関中学院)
2010年8月	秦漢唐皇帝陵調査(秦始皇帝陵・鴻門の会遺跡・漢武帝茂陵・霍去病墓・唐太宗昭陵・西北大学博物館)
2011年9月	秦漢唐皇帝陵・都城調査(秦東陵・秦始皇帝陵・漢高祖長陵・漢惠帝安陵・漢景帝陽陵・漢武帝茂陵・漢薄太后南陵・咸陽市博物館・秦咸陽宮・秦阿房宮・漢長安未央宮)
2012年3月	秦始皇帝陵調査
2013年3月	秦始皇帝陵調査
2014年1月	秦漢唐皇帝陵調査(秦始皇帝陵・漢文帝霸陵・漢昭帝平陵・漢宣帝杜陵・漢元帝渭陵・漢成帝延陵・漢哀帝義陵・漢平帝康陵・昆明池)
2014年8月	漢唐皇帝陵調査(唐睿宗橋陵・唐憲宗景陵・唐穆宗光陵・唐玄宗泰陵・漢武帝茂陵・秦咸陽宮)
2016年8月	隴山・宝鷄調査(秦始皇帝陵・五丈原)
2018年8月	淑徳大学海外歴史研修 [三門峽・西安](秦始皇帝陵・西安碑林博物館・五丈原・漢武帝茂陵・秦咸陽宮・香積寺・興教寺・大雁塔・西市博物館・西門城壁)
2019年8月	淑徳大学海外歴史研修 [洛陽・西安](秦始皇帝陵・西安碑林博物館・南門城壁・大雁塔・唐長安大明宮・漢長安未央宮・秦阿房宮・漢宣帝杜陵・曲江池遺跡公園)